FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2022.9.22 No.66

令和４年度秋季特別展

百貨店の近代 ～文化と娯楽の花咲くところ～

はじめに

皆さんは、休日のお買い物はどのようなところでしていますか？家族連れで郊外のショッピングセンターに行って、衣食住の様々なものを買うという人も多いのではないかと思います。

そうした買い物をする場の一つとして、百貨店を挙げる人もいるでしょう。福井県内の百貨店としては、現在、西武福井店がありますし、目を全国に向けると三越や髙島屋といった百貨店でお買い物をしたことがあるという人も多いのではないでしょうか。かつて、百貨店は、ただ買い物をするための場所ではなく、都市の文化や娯楽を象徴する場所でもありました。

秋季特別展では、百貨店が国内に登場した明治30年代から昭和戦前期を中心に百貨店の歩みと人々との関わりを振り返ります。

だるま屋百貨店の包装紙（当館蔵）

(1) 百貨店以前

日本に百貨店が登場する以前、江戸時代の日本では呉服は呉服屋というように、それぞれの店が決まった商品を取り扱っていました。そうした店では、「座売り方式」という販売方法がとられていました。これは、店を訪れた客と店員が対話するなかで、店員が客の要望を聞き取り、客の求める内容に近い商品を蔵から取り出して客に示し、客が納得すれば購入するという仕組みでした。

また、この頃の商家は暖簾などによって、店の中の様子が分からないようになっていました。

後の三越もこの頃は呉服商を営んでいました。また、髙島屋は当初古着木綿商や呉服木綿商でした。

髙島屋の創業者は、飯田新七（初代）という人物でした。新七は、京都に生まれ、天保２年（1831）に京都烏丸松原上ル西側に古着木綿商として「たかしまや」を開店しました。新七は、「正札（しょうふだ）」、「正道（せいどう）」、「平等の待遇」という三ヶ条を定めて商売に邁進し、次第に商売を大きくしていきました。

この初代飯田新七の父が、敦賀出身の中野宗次郎という人物でした。新七は、福井ともゆかりのある人物なのです。展示では、初代飯田新七に関する資料も紹介します。

こうした江戸時代の店に対して、百貨店の大きな特徴は、先ほど述べた座売り形式を廃止したことです。それまでの座売り方式とは異なり、百貨店では、商品がフロアやショーウィンドウに並べられ、その間を来店客が自由に見て回り、自分自身で気に入った商品を選んで購入するかたちになりました。

第１章では、浮世絵などの日本で百貨店が生まれるまでの資料を展示します。

(2) 百貨店の誕生とあゆみ

江戸時代に三井呉服店と名乗っていた商店は、明治37年（1904）12月に「三越呉服店」となります。三越呉服店は、翌年１月２日の新聞広告で「デパートメントストア宣言」を掲載し、百貨店化を進めていきます。「デパートメントストア宣言」を契機として、白木屋、松坂屋、松屋、髙島屋、十合、大丸といった東西の商店も百貨店化を進めていきました。

三越では、有識者や文芸家などを集めて「流行研究会」（流行会）が結成されました。流行研究会は、衣装や調度品の流行、社会風俗の傾向などを研究し、三越に助言を与えました。日露戦争後には、元禄時代の風俗を模した「元禄模様」が三越によって考案され、人気を博しました。こうしたデザインを広く世に知らせるため、百貨店各店ではPR誌が盛んに発行され、PR誌を通じて、「流行」が形成されていきました。また、

髙島屋でも衣服のデザインを公募するなど、各店が競ってファッションの流行を作り出し、発信していきました。

百貨店は、ファッションに止まらず、都市文化の中心となっていきます。百貨店で盛んに開催された催し物もその一つです。例えば、髙島屋が昭和2年(1927)に開催した「日光博覧会」では、「日光を見ずに結構というなかれ」のキャッチフレーズが有名となり、1日に20万人を超える人が訪れたといわれています。

ここでは、東西を代表する百貨店である三越と髙島屋に関連するポスターやPR誌などの資料を展示し、国内における百貨店の歩みを紹介します。

新案家庭衣裳あわせ(東京都江戸東京博物館蔵)

(3) 福井の百貨店

東京の三越や大阪の髙島屋、名古屋の松坂屋など、当初の百貨店は、大都市で商店から発展したものが中心でした。そして、大正・昭和期になると、地方都市でも百貨店が登場してきます。

福井県に百貨店が登場するのは、昭和3年のことです。この年の7月6日、福井市に「だるま屋百貨店」が開店しました。

だるま屋百貨店の創業者は坪川信一という人物です。坪川は、福井師範学校を卒業した後、県内の小学校で勤務し、県庁職員や商工会議所副会頭を経て百貨店経営を始めたという異色の経歴の持ち主でした。坪川に限らず、創業時の中心メンバーは全て元教員でした。

坪川は、店員教育に熱心に取り組みました。毎年末に坪川が記した「報告」では、店員を「コドモ達」と呼び、私心なく熱心に働くこと、隠し事をしないこと、自身の心に照らして正しいと思うことを堂々と行うことを繰り返し店員に呼びかけています。

坪川はだるま屋を店員全員で経営するものと位置づけており、利益は勤続期間や勤務態度などによって社員に配分していました。また、毎年、海水浴や慰安旅行も実施されていました。

こうした取り組みの結果、だるま屋は戦後にいたるまで、一つの大きな家族のようであったとされています。今回の展示にあたってお話を伺った当時の店員の方は口を揃えて、だるま屋の家族のような雰囲気に言及されます。

だるま屋は対外的にも「強く、正しく、私心なく」、「みなさまのだるま屋」といったモットーを掲げていました。坪川が特に重視したのは、子どもでした。子ども用の遊園地として「コドモノ国」が設けられたほか、クリスマスや小学校入学時には、子どもたちにプレゼントが配られました。

また、だるま屋の特徴として、少女歌劇の存在が挙げられます。当時、小林一三の宝塚少女歌劇が流行っていたこともあって、各地に少女歌劇が次々に誕生していました。だるま屋でも、昭和6年に少女歌劇が結成されました。宝塚少女歌劇は、小林が三越の少年音楽隊から発想を得て結成されたといわれていますが、三越で始まった少年・少女の芸術活動が回り回って福井の地で再び百貨店と一緒になったといえるでしょう。

だるま屋に続いて、県内でも次々と百貨店が誕生します。福井市内では、エレベータを備えた吉野屋百貨店や石川県の宮市大丸を親会社とする福屋デパートが誕生し、武生町(現 越前市)では大井百貨店が開店しました。

大井百貨店は、武生町のランドマークとして、昭和初期に描かれた「武生町鳥瞰図」にも描かれています。この展示でも、同店に所蔵されている東郷青児デザインのマネキンや看板、昭和初期のレジスターなどを展示します。

戦後になると、福井駅にステーションデパートが開店しました。ステーションデパートは、鉄道を利用する人びとがお土産を買う際によく利用されました。

ここでは、ポスターや包装紙など昭和期の福井県内の百貨店に関連する資料を展示し、福井県内の百貨店のあゆみを紹介します。

だるま屋は、昭和23年に株式会社化され、昭和55年には西武と資本提携し、「だるまや西武」と名前を改めました。その後、平成に入ると、「西武福井店」となり現在に至ります。

今回の展示にあたり、多くの方から、お中元などの贈り物はだるま屋の包装紙に包まれているだけで箔がついたというようなお話を伺いました。だるま屋をはじめとした百貨店が、いかに地域と密着した存在であったかを示す証言であると考えます。

百貨店によく行くという人も、あまり行かないという人も、この展示を通じて、百貨店と私たちのこれまでとこれからについて考えてみてはいかがでしょうか。

(橋本紘希)

館蔵資料紹介

2つの「福井県管内地図」

[形態・法量]　軸装・縦185.3×横134.4(cm)[時代]明治18～22年（1884～1889）
[形態・法量]　軸装・縦185.0×横160.5(cm)[時代]明治22～29年（1889～1896）

当館では、令和3年(2021)に2つの地図を購入しました。どちらも「福井県管内地図」と表題がつけられた、手描きの地図です(画像1-1、2-1)。色彩や文字の位置などよく似ており、凡例やそこに描かれた記号(画像1-2、2-2)、また方位記号(画像1-3、2-3)もほとんど同じです。今回は、この2つの地図について、それぞれいつ作成されたのか、作成目的は何だったのか、そしてこれら地図の特徴について紹介します。

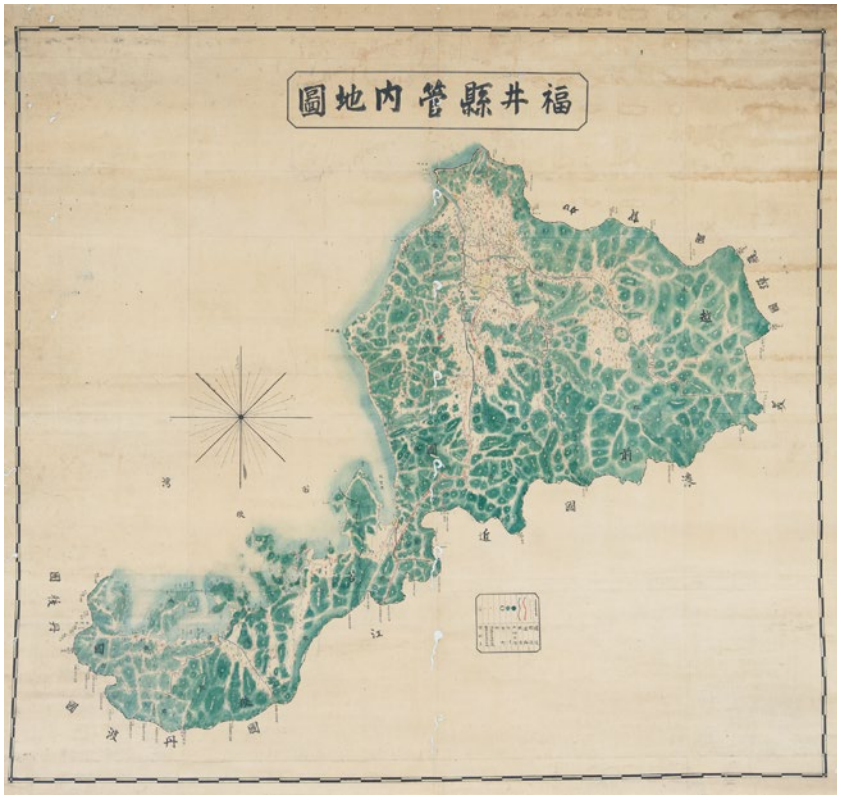
地図の作成時期

まず、地図の表題にある「福井県」という語に注目します。地図には2つとも嶺北地域と嶺南地域が一体となった福井県が描かれていますが、福井県がこのような形になったのは明治14年(1881)以降とされます。また、後述するように、どちらの地図にも凡例に「醤油営業者所在地」が見られることから、醤油税が存在した明治18年以降に作成されたものであると考えられます。

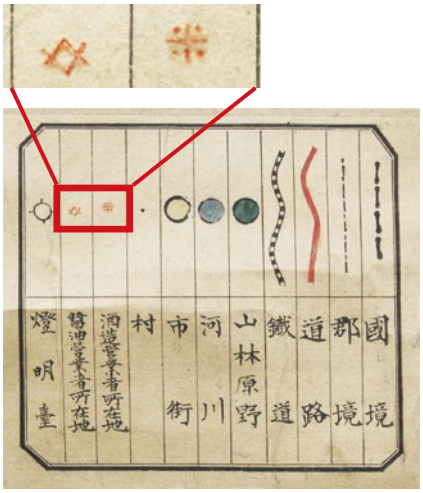
さて、2つの地図はよく似ていますが、細かく見ると異なる点も見受けられます。その1つが地名の表記です。たとえば、画像1-4を見ると、現在エルパなどが立地する大和田や高柳といった地名が黒字で記載されています。同じ範囲を示した画像2-4には、黒字の地名に加えて「中藤嶋村」と朱字があり、その範囲が黄色く塗られています。同様に坂井港(現三国港)付近である画像1-5を見ると、黒字で宿浦や米ヶ脇浦といった地名が確認できますが、画像2-5ではそれらに加え、朱字で書かれた「雄島村」や「加戸村」といった地名が見られます。黒字の地名は、現在おもに地区名として残る江戸時代の村名で、朱字の地名は明治22年に施行された市制・町村制により新しく使用され始めたものです。そのため、一方の地図は明治22年以前に作成されたもの、もう一方はそれ以降に作成されたものと判明します。

加えて、明治22年以降の地図では、現在は岐阜県に属する石徹白が下穴馬村に含まれています(画像2-6)。石徹白は、明治29年に下穴馬村から分立して石徹白村となります。そのためこの地図は、明治29年以前に作成されたものであることがわかります。

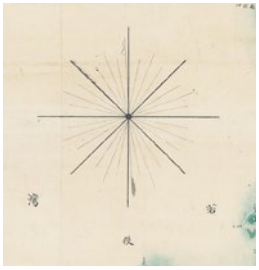
以上をまとめると、一方の地図は明治18年から明治22年の間に作成されたもの、もう一方は明治22年



画像1-1：福井県管内地図(明治18～22年作成)



画像1-2：凡例



画像1-3：方位記号

から明治29年の間に作成されたものと考えられます。

なお、明治22年以前の地図には敦賀の立石岬に灯台(燈明台)の記号が描かれています。この灯台は明治14年に建てられたもので、日本海沿岸では角島灯台(山口県)に次いで2番目に点灯しました。明治22年以前の時点では、灯台は珍しく、特徴的なものであったため、記号が描かれたと考えられます。しかし、明治22年以降の地図には描かれていません。地図の作成目的からすれば不要ということで、灯台の記号はのちに省かれたことがうかがわれます。

地図の作成目的

2つの地図の表題には「管内地図」とあります。管内とは、役所が管轄する区域内を意味する言葉です。そのため、これらの地図は、福井県が管轄する区域内を示した地図であるとともに、福井県により作成、使用された地図であると考えることができます。

では、これらの地図を作成した目的はなんだったのでしょうか。凡例を見ると、国境や郡境などといった基本情報のほかに、「酒造営業者所在地」と「醤油営業者所在地」が示されています。

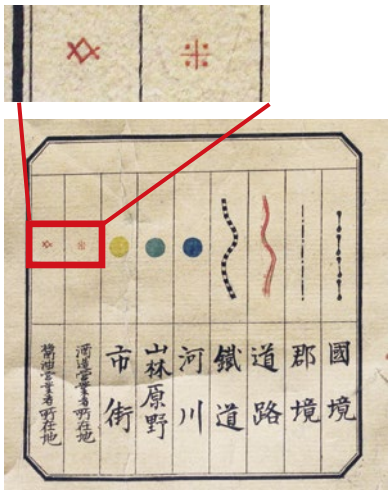
明治時代において、酒と醤油はどちらも課税対象でした。江戸時代には、清酒、濁酒、醤油は「三造(みつくり)」と称され、その製造者には冥加金(みょうがきん)という税が課されていました。この税は、明治時代以降も営業税を含んだ酒税・醤油税として踏襲されます。しかし、醤油税については、醤油は日用の生活必需品のため課税は不当であるという理由により、明治8年から一時的に廃止されました。醤油税はその後、軍備拡張の財源確保のため明治18年に復活し、大正15年(1926)まで徴収されました。

酒税は国税、醤油税は地方税(明治29年以降は国税)でしたが、どちらも県職員が納税額を検査していました。福井県職員の業務の備忘録として著された『福井県官民日用便覧』(明治26年、国立国会図書館蔵)によれば、酒税は年4回、醤油税は年3回検査することとなっていたようです。つまり、これらの地図は、当時の福井県職員が、検査対象である酒税・醤油税を納税する各製造者の所在を把握するために作成・使用したものと考えることができます。

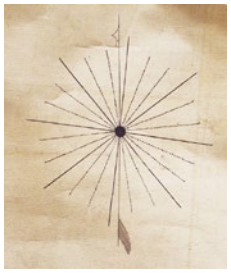
地図の特徴

これらの地図を見ることで、福井県内の酒造・醤油営業者(製造者)の分布を把握できます。さらに、2つの地図を見比べることで、営業者の分布の変化がわかります。たとえば、先ほど見た大和田やその西の舟橋には、明治22年以前には酒造営業者は見られませんが、明治22年以降には確認できるようになります(画像1-4、2-4)。また、現三国港付近の宿浦では、明治22年以前には醤油営業者が見られませんが、それ

画像2-1:福井県管内地図(明治22～29年作成)



画像2-2:凡例



画像2-3:方位記号

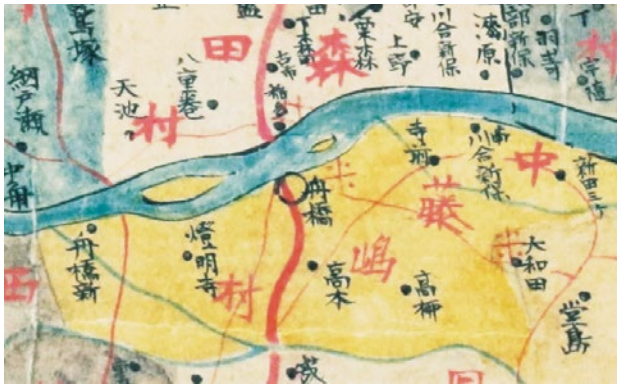
以降には確認できます(画像1-5、2-5)。実はこうした情報は大変貴重なものです。

明治時代の福井県内の酒造・醤油営業者を調べるうえで代表的な資料として、各年度の『福井県統計書』が知られています。そこには、各営業者の数は記されていますが、その所在地までは記されていません。所在地が判明する資料としては、『福井県下商工便覧』(明治20年、当館蔵)、『商工重宝』(明治43年、当館蔵)、『福井商工人名録』(明治44年、福井県立図書館蔵)などがありますが、これらは福井や武生など主要都市部の営業者の記載にとどまっています。明治時代の福井県内全域での酒造・醤油営業者の分布を示した資料は、これまで確認されてこなかったのです。酒や醤油は、生活に身近な存在でありながらも、明治時代にそれらがどこで製造されていたのかについて知ることは、従来非常に困難だったといえます。

ただし、これらの地図からは、何名の営業者がいたかまで知ることはできません。たとえば、福井に描かれている酒造・醤油営業者所在地の記号は1つずつですが(画像2-7)、『福井県下商工便覧』から福井には酒造営業者が5名、醤油営業者が8名いたことが判明します。これらの地図は、ほかの資料と組み合わせて見ることで、酒や醤油をとりまくかつての福井県の様子を、より具体的に私たちに伝えてくれる資料といえます。

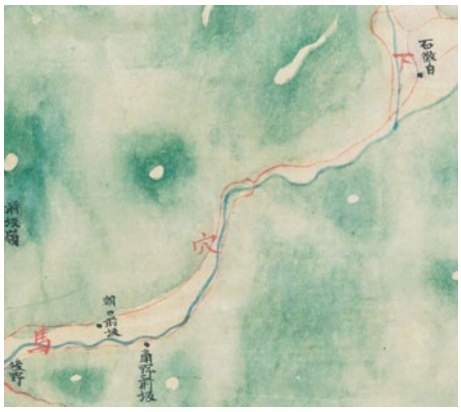
(伊藤大生)

画像1-4:大和田、高柳付近(明治18～22年)


画像2-4:大和田、高柳付近(明治22～29年)

画像1-5:
坂井港(現三国港)付近
(明治18～22年)

画像2-5:
坂井港(現三国港)付近
(明治22～29年)


画像2-6:
石徹白と下穴馬村
(明治22～29年)

画像2-7:
福井
(明治22～29年)

研究ノート

歌川豊春 画「浮絵和国景跡龍宮玉取之図」と夢楽洞万司 画「大織冠」図絵馬

はじめに　浮世絵と絵馬

まず、二つの画像を見てください。ひとつは、歌川豊春による「浮絵和国景跡龍宮玉取之図」(画像1)で、18世紀後半に江戸で出板された多色摺りの浮世絵版画です。もうひとつは、幕末ごろに福井で描かれた「大織冠」図絵馬(画像2)です。ぱっと見て「似ている」と思いませんか？それもそのはずで、この二つの作品は、同じ物語「大織冠」の「玉取り」の場面を題材に描かれたものなのです。とはいえ、題材が同じというだけでは、ここまで似ることはないでしょう。結論からいえば、先に出版された「浮絵和国景跡龍宮玉取之図」の影響を受けて、「大織冠」図絵馬が描かれたと考えられます。二つの作品を見比べながら、夢楽洞万司の「大織冠」図絵馬の特徴を考えていきます。

「大織冠」の物語

二つの作品の題材の「大織冠」は幸若舞の演目で、タイトルの「大織冠」は藤原鎌足を指します。物語の内容は次のとおりです。鎌足の娘が唐の太宗皇帝の妃になり、娘は宝珠を鎌足に贈ります。その宝珠が龍王に奪われたため、鎌足と契りを交わした海女が取り返します。謡曲「海士」と同じ題材とされています。今回の浮世絵と絵馬に描かれているのは、物語のクライマックス、龍宮から宝珠を取り返した海女を龍王の軍勢が追う、緊迫した場面です。

歌川豊春 画「浮絵和国景跡龍宮玉取之図」

まず、「浮絵和国景跡龍宮玉取之図」(以後、玉取之図)を見ていきます。作者の歌川豊春(1735-1814)は、江戸時代中期の浮世絵師で、歌川派の祖でもあります。豊春は、西洋画の透視図や遠近法を取り入れた立体的な絵(「浮絵」)を得意としました。この作品もそのひとつです。

浮絵の特徴は画面の左手の龍宮の建物によく表れています。龍宮の天井と床の描線が画面奥に向かう集中線として描かれており、強制的に奥行が表現されています。また、海面から立ち上がる土台と柱も立体感と奥行を強調しています。同時に、画面手前の人物や建物は大きく、奥は小さく描くことで、作品全体に遠近感をつけています。

画面全体の構成を見てみましょう。もっとも手前に配置されているのは画面右手の中国風の建物です。次が左手の龍宮城で、両者の間に龍王とその軍勢、中央やや右に宝珠を奪って逃げる海女が描かれています。中景には龍宮の門と塀が描かれており、龍宮と外との境界が明示されています。その奥の右手、遠景に鎌足らの船群、さらに奥に海岸が描かれています。海岸も手前から奥へと岬が連なり、その先に水平線が引かれて、海と空の境界をなしています。

注目ポイントは、龍王の軍勢です。画面左手、龍宮城の手前に、龍とともに描かれている人物群で、頭に魚や海老などの海産物を載せることで、龍王の軍勢であることが示されています。彼らは、宝珠を持って逃げている海女を追っています。

夢楽洞万司 画「大織冠」図絵馬との比較

この絵馬は、江戸時代後期から大正時代まで5代にわたって福井城下(現在の田原町2丁目付近)で絵馬を製作・販売していた工房「夢楽洞」の絵馬師・万司(2代)の作品を復元複製したものです。夢楽洞万司の絵

画像1：浮絵和国景跡龍宮玉取之図

龍王の軍勢

馬は、嶺北地方を中心に各地の神社に残されています。当館では、常設展示「歴史ゾーン」に夢楽洞万司の絵馬工房を推定再現し、江戸時代の福井を彩った文化財として万司の絵馬を紹介しています。

では、先に述べた玉取之図と比較しながら、この絵馬を見ていきます。まず、大きさが違います。玉取之図は縦25.5×横38(cm)に対し、「大織冠」図絵馬ははるかに大きく、縦90×横183(cm)です。構図と構成要素の異同は表1に示しました。ここでは、相違点に注目します。

①龍の配置　共通の要素のうち、龍の配置は両者で大きく異なっています。玉取之図では、画面左手前に軍勢の先頭に描かれているのに対し、「大織冠」図絵馬では画面のほぼ中央に単体で、しかも海から浮かび上がるように描かれています。この変更により、絵馬を見たときに最初に龍が目に入るようになり、絵馬の大きさもあいまって、より迫力を増す配置になっています。

②龍王の軍勢　玉取之図では龍王の軍勢が宮殿の奥から画面左の手前に集中しています(22名中19名)。これにより、軍勢が宝珠を取られたことに気が付き、海女を追いかけるという物語の流れとともに、人物の大きさの書き分けによって遠近感も補強されています。「大織冠」図絵馬では、画面手前に8名の兵をほぼ同じ大きさで一列に配置しています。構図を単純化したとも取れますが、軍勢の頭に乗った海産物に注目すると、別の目的が見えてきます。玉取之図では、頭上の海産物で種類が明確なのは、亀、フグ、ヒラメ、エビ、サザエで、他は魚だということがわかる程度です。いっぽう、「大織冠」図絵馬では、とくに画面手前の8名は、アワビ、フグ、タイ、オコゼ、カニ、エビ、アンコウ、イカがはっきり描かれています。それだけでなく、フグは鉄砲、タイは大将、オコゼは異相、カニは横歩き、エビは老人、イカは鎗を持つというように、海産物の属性を人物の姿や持物に反映させています。また、女性を追加し、頭上にアワビを描いています。さらに、玉取之図では龍王の軍勢に紛れている「タコ」を画面中央の左奥に単独で配置し、持たせる武器も2種類から4種類に増やして「8本足」というタコの特殊性を際立たせています。これらの変更により、「大織冠」図絵馬には、絵解きの楽しさと、見た瞬間にわかる面白さが加味されているといえます。

③海女の配置　玉取之図では、門と塀によって龍宮の中と外が明確に分けられており、海女は龍宮の塀の内側、龍王の軍勢の近くに配置されています。これは宝珠を取り返した直後の場面と考えられます。いっぽう、「大織冠」図絵馬には門と塀は描かれず、海女は龍や龍王の軍勢から離れて、鎌足の船との中間に描かれています。この変更により、海女が見やすくなるだけでなく、追手、逃げる海女、救援の鎌足たちという役どころも、より分かりやすくなっています。

ほかにも、海面に渦を描く、奥行きを波のぼかしと板の木目の組み合わせで表現するなどの工夫が見られます。

まとめ

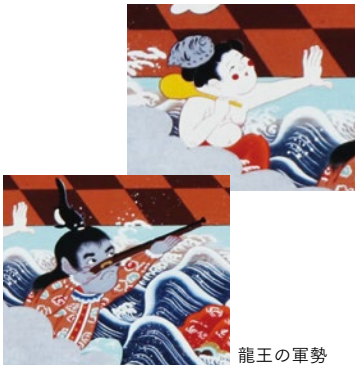
上記のアレンジは、個人が手元で見る浮世絵版画と、神社に奉納され壁にかけられて、いちどに大勢の目に触れる大型の絵馬との違いを意識したものと考えられます。玉取之図の影響を受けつつ、さらにインパクトを強く、分かりやすく、楽しい絵馬に仕上げて人々を喜ばせたいという、夢楽洞万司の職人気質とサービス精神の賜物ともいえるでしょう。

夢楽洞万司の絵馬には、「大織冠」図以外にも、浮世絵からヒントを得たと思われる構図や人物(ポーズ)が散見されます。福井の絵馬師・万司が、江戸をはじめとする都市部の文化である浮世絵などからどのように影響を受け、どんな工夫や個性を加味して絵馬を仕上げたのかを探ることは、当時の福井の庶民文化の豊かさを知る手がかりになるのではないでしょうか。

(瓜生由起)

表1

構成要素	浮絵和国景跡龍宮玉取之図	「大織冠」図絵馬
龍宮	画面左手	画面左手
龍	画面左手	画面中央
龍王の軍勢①	画面左手	画面左手から中央
龍宮の楼閣	画面右手前	画面右手前
龍王の軍勢②	画面右手前	画面右手前
龍宮の門・塀	画面中央	なし
サンゴ	画面中央やや左	画面中央奥
海女	画面右手前	画面中央奥
鎌足の船群	画面右中ほどから奥	画面右奥
海岸	画面右奥	なし
水平線	画面奥	なし
タコ	左手前(軍勢に埋没)	左奥(単体)



龍王の軍勢

画像2:「大織冠」図絵馬

博物館日誌（令和4年4月～8月）

4月

- 8日㈮
  幸若舞「敦盛」DVD再生会（演奏のみ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター協力）（エントランスホール）
- 9日㈯
  ミュージアム・サポーターズクラブ認証式
- 19日㈫
  あわら市郷土歴史資料館来館（資料調査）
- 23日㈯
  ふくい歴博講座「戦国時代の真柄氏一新発見史料 真柄氏家記覚書の紹介一」
- 24日㈰
  興徳寺（敦賀市）の皆様来館
- 26日㈫
  国高小学校　団体見学
- 28日㈭
  味真野小学校、武生南小学校、加賀市金明小学校 団体見学
  ふくい歴女の会会長後藤ひろみ氏による「電車の旅で福井の歴史を学ぶ　福井鉄道（福井駅～越前武生駅）編」上映（2階ロビー）

5月

- 6日㈮
  武生西小学校、あわら小学校　団体見学
- 7日㈯
  ミュージアム・サポーターズクラブ主催「体験！昭和のあそび～春編～」
- 10日㈫
  新収蔵品展「戦国越前の謎を解く～真柄十郎左衛門の正体など～」終了（3月12日より）
  幸若舞「敦盛」DVD再生会終了、「電車の旅で福井の歴史を学ぶ　福井鉄道編」上映終了（終了後もYouTubeで公開）
- 17日㈫
  写真展「戦国越前の謎を解く～明智光秀（青の10年）～」終了（エントランスホール、1月3日より）
- 19日㈭
  写真展「福井復興博覧会」（～9月13日）
- 24日㈫
  こども歴史文化館来館（資料借用）
- 25日㈬～6月3日㈮
  休館日（館内メンテナンス）
- 25日㈬
  あわら市郷土歴史資料館来館（資料借用）

6月

- 1日㈬・2日㈭
  北信越博物館協議会（福井県）
- 9日㈭
  福井高校　団体見学
- 9日㈭～21日㈫
  特別公開展「越の大徳（こしのだいとこ）泰澄大師」
- 17日㈮
  オンライン福井観光商談会
- 18日㈯
  こども歴史文化館来館（資料調査）
- 25日㈯
  足羽中学校　団体見学
- 26日㈰
  神戸大学名誉教授室崎益輝氏、福井大学名誉教授酒井明子氏一行視察（福井震災）
- 30日㈭
  学芸員出前授業　黒河小学校

7月

- 14日㈭
  常設展示「昭和のくらし」夏の模様替え
- 19日㈫
  福井大学語学センター日本語教育部留学生　団体見学
- 23日㈯
  特別展「ふくいの御乗物」開会式・内覧会・オープン（～8月31日）
- 26日㈫
  あわら市郷土歴史資料館来館（資料調査）
- 28日㈭
  ミュージアム・サポーターズクラブ打合
- 29日㈮
  新発田市立歴史図書館来館（館内調査）
- 30日㈯
  ふくい歴博講座「ふくい乗物探訪」

8月

- 4日㈭
  福井県で記録的豪雨
- 6日㈯
  特別展「ふくいの御乗物」記念講演「江戸時代の乗物と駕籠～文化とデザインの話～」（東北生活文化大学 美術学部 美術表現学科　講師　落合里麻先生）
- 15日㈪
  みくに龍翔館来館（資料調査）
- 19日㈮
  博物館実習（～8月23日）
- 20日㈯
  特別展「ふくいの御乗物」展示解説
- 21日㈰
  ミュージアム・サポーターズクラブ主催「体験！昭和のあそび～夏編～」
  特別展「ふくいの御乗物」展示解説
- 23日㈫
  青山学院大学・一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館（資料調査）
- 25日㈭
  京都女子大学　団体見学
- 31日㈬
  福井県立歴史博物館運営協議会

ミュージアム・サポーターズクラブ主催「体験！昭和のあそび～夏編～」（令和4年8月21日）

秋季特別展

百貨店の近代
～文化と娯楽の花咲くところ～

開催期間：令和4年10月22日㈯～11月27日㈰
休 館 日：11月9日㈬
観 覧 料：一般400円　大学・高校生300円
小中学生・70歳以上の方200円
※20名以上の団体は2割引

※会期・内容は、予告なく変更される場合があります。
公式サイトなどで最新の情報をご確認の上、ご来館くださいますようお願い申し上げます。

［編集・発行］
福井県立歴史博物館
〒910-0016 福井市大宮 2-19-15　TEL.0776-22-4675㈹
https://www.pref.fukui.lg.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム
No.66　令和4年9月22日発行